

自分たちがまず頑張ろう

語り手 衣川 兆（高校四期生 現立命館守山中学校教員）
聞き手 河合 志野

*

中学生時代

―バスケっていつから始められたんですか？

中学校から部活で。京都の大枝中学校ってところ。

―京都出身なんですね。

京都からずっと通ってた。高校三年間。自分含めて三人かな。同じ中学校で立守にいた同級生。

―でも、立命館（附属高校）って京都にもあるじゃないですか。立守をなんで選ばれたんですか？

ぶっちゃけると、推薦は無理やって。成績的にね。バスケはそれなりにちゃんとやってたから、（高校でも）どこかでやりたいなって話をし。て。そしたら顧問の先生の息子さんがちょうど一個上に（立守に）いはって。その練習環境いいよって言われたから、そこ行きたいなって話してた。顧問の先生が中二の時に担任してくれてはったからそのときにね。偏差値的にも頑張ったら専願でいけんこともなかったから、ちょっと受験してみるかってなったかな。

―（推薦をとるための評定）高いですよ。

高い。でも当時なんぼやる。あんま分からへんけど、そんな四〇とか絶対ない。でも「無理」って。

―AM（コース）ですか？ GL？

いや、そんなときはコースがなくて。僕らのときって中入生がいない最後の学年やってん。四期生。五期生から中入生の一期生、中学一期生が合流したみたいな。中学はあつたけど、入った時に一期生が中三って感じ。だから初めて全部そろったのがそこかな。中一から高三までの六年がそろったときの高一。

―じゃあコースはなかったんですね。

コースっていう概念がなくて。AMって言ってたんかな、あん時は。いや、言ってなかった気がする。（高校一年は）六クラスしかなかったし。

―バスケ強いですよ。ここ（立命館守山）。

そう。それでバスケ強いって言われて入ってん。いうても、中学から始めたし、そんな高校で試合出るとかないかなと思ってた。バスケ部って強化部っていわれてるやん。やのに（同級生が）六人しかいいひんくって。

―そうそう、びっくりしました。（事前に教えていただいた）

え、六人？ みたいな（笑）。先輩らも十人ずつぐらいしか学年にいいひんかったから……、十人もいいひんかったんちゃうかな。三〇人超えてへんくて、三年生そろってても。

―自分たちの学年で六人。最後の年とかって？

高三になったときの高一高二は中入生が合流してるから逆にめっちゃ増えて。（部活全体で）いきなり四〇人ぐらいいた。初めはほんまに人

数少ない中で練習してたのに、高三になったら「なんか、めっちゃいんねんけど」

―あはは。めっちゃ仲間増えたみたいな。

高入のスポーツ推薦とかの子も入ってくるし、中学校でバスケしてた子も入ってくるしな。一個下やったら初心者の子も一人入ってきてたし。だから一個下は名前覚えてるけど、二個下とか全然もう覚えられへん。

―今は(部員)多いですか？ 顧問してはる中学。

中学自体は各学年十人行かへんぐらいだから、三学年今そろってて二五かな。

―そうなんですね。母校の顧問をするってどんな感じなんですか？

なんか(初めは)ムズがゆかった。なんか気持ち悪いみたいな。先生って言われるのがめっちゃ、「ああ」ってね(笑)。

―小森先生…

がそのとき顧問。小森先生にバスケット教えてもらって。一年目(先生として)ここ来て。そのときは小森先生が学年主任してる高三に入ってたから、ちょっとやりやすかった。

―そうなんですね。じゃあ、高校も？

一年だけ。五年前に一年だけ高三やって、中一、中二、中三、中一、中二で今。

―じゃあ高校の先生の免許も持ってらっしゃるってことですか？

持つてる。国語はもう国語の免許しかないから。そのときはそうやな、現代文の授業してた。

―そうなんだ。国語得意やったんですか？

本読むのは好きやってん。中学校の時とか。母親が国語の教師してて、その影響で「本読め、本読め」って感じやったから本読んで、暇な時はゲームするかバスケするかみたいな。

―文理選択は文系だったってことですか？

そう。でも、それが迷ってん。今、高二になるときに選択するやん。そのときは高三やって、高二の終わりで最後別れるみたいな。で、数学もそれなり好きやってん。国語も好きやって。なんとなく教師したいなとは思ってたから数学の教員になるか、国語の教員になるかで迷って、最終的に国語選んで、じゃあ文系にしようって。

―それはなんで国語になったんですか？

理系が嫌やった(笑)。数学は好きやけど、物理が壊滅的に苦手で。「物理もう一回しなあかんねやったら無理やわ」と思って(笑)。で、やめたかなあ。入試の段階で、理科すら受けてへんから。昔、三教科やってん。

―あ、そうなんですか？

そうやで。英数必須で、国語か理科選べた。今は五？ 三教科の人もいる？

―いいいです。全部五教科。

五教科か。五教科やったら絶対無理やった。そう、それも選んだのに理由はあったかもしれん。理科やらんでいいんやみたいな。国語好きや

ったし、数学もまあそれなりに解けたし、英語だけ頑張ったらしいんや
って。英文だけ読めたらいいや、みたいな感じで受験。しかも京都の公
立って二月の十日が受験日で、立守って早くて二月の三日とかやったか
な。一週間ぐらい早くて。もしあかんくても次、京都で普通に受験がで
きるみたいな。懐かしいな、中三。

―(高校時代) 課題、大変じゃなかったですか？

今ほど多分そんなに課題課題してなくて。もちろんタブレットもパソ
コンもなかったし、全部ノートとプリントやったし、テストも結構いろ
いろあったし。だから今さ、三年生とかやったらテストがない日がある
やん。「なんそれ」みたいな(笑)。

―デジタルな感じになって。

そう。教育実習で立守の中学校に来てんけど、ちょうどその前の年ぐ
らいにiPad導入したときやって。それで授業していいよみたいな
分からへんって(笑)。使ったことないねんけど。何それ、みたいな
(笑)。普通にプリントで授業してた。

―そうだったんですね(笑)。話を移すのですが、学生時代推しとかい
たんですか？

なかった、なかった。そんな概念はなかった。俺個人的に。もうだっ
て、朝五時半に起きます、朝ごはん食べます、家出ます。七時のバスに
乗ったかな、七時十分ぐらいに着きます。で、八時過ぎぐらいまで一時
間ぐらい練習して、授業受けて、お昼休み、また授業受けて……、昔は
さ、完全下校も結構緩くて。今多分一八時？

―そうですね。一八時半で強化指定(クラブは)一九時です。

一九時に帰れとかやん。昔も一九時やって、あかんけどみんな残って
るときもあった。体育館で練習とかやったら、体育館でみんな自主練し
てて。二〇時に一回バンって電気が消えて、それもう一回つけたらクレ
オさんが「体育館に誰かおるぞ」ってのを高校の先生に言わはって、小
森先生とかがきて「おまえらまだいるんか」「すみません」みたいな。
「はよ帰れ」って。はい、帰ります、ってね。そんな感じやったな。

(少し間をおいて)

―あれ(私のクラスの出し物である「極・萌」と書かれたホワイトボー
ドを指さす)やるんです。やりましたか？ 文化祭何か。

一年生の時は「展示を作りましょう」みたいな。二年生の時に「教室
劇をやりましょう」で、三年になって「市民ホールで劇やりましょう」
ってもう(やることは)完全固定やって。こんな自由ってなったのって
多分この(自分たちの代の)後ぐらいじゃないかな。

―なんの劇してはったんですか？

高二なんやったつけない。覚えてない。シーンは覚えてんねん。最後教
会で結婚式する話。

―オリジナルですか？

いや、違う違う。オリジナルは高三の時にやろうって言って。大失
敗やってんけど(笑)。

―えええ(笑)？ どういう物語なんですか？

俺、プロ長(プロジェクト長)クラスプロジェクトをまとめるリーダ
ー的役割)やってて。クラスの子が(脚本を)考えてくれた。高校生の

女の子が交通事故に遭って、両親亡くなった事故のショックで過去に飛んで……、みたいな。

―タイムリープものみたいな。なんで大失敗なんですか？

まず、要は全員が完全にそれで納得していたわけじゃなくて。多数決でオリジナルやろうって決まってんだけど、でもやっぱりその何人かは

「もともとある話でいいやん」みたいな。そこに時間かけるより、練習時間かけた方がいいやんって。んで溝が生まれ……、その辺のいろんな勘違いからごたごたしてきて。リハーサルの時に見て、「あれ？ やばくね？」って思った。劇団の人が（演技を教えるに）来てくれてはって、その人に「やばいね」って言われた。練習終わったみんな集めて、「なんなん」って。「練習は集まらへんしき、なんでそんな一部の人が頑張らなあかんの」みたいな話を円になってした。そんな時にみんなからいろいろわーっと文句が出てきて。そこでもう「はあ……」ってなった（笑）。

―それでも、最後は披露して？

「でもみんなで頑張ろう」って。なんとか形にはなったし、一回公演やから。やってよかったなって。でも劇自体はもうボロボロや。そんな賞も取れへんし。

―そうだったんですね。

＊

大学から今に向けて

―内部進学のことを聞きたくて。もう絶対（立命館大学に）上がろうみたいな、決めていらっしやったんですか？

もう上がるは上がりたくて。半分はほら大学受験せんでいいやんみたいな考えもあったし、そのまま立命館にいけるんやったらいつかって。もう文系に行った時点で国語の免許は取ろう、教員免許は取ろうと思ってたから、取れるところで選んでそこに行った感じかな。

―学部とかは？

文学部。

―文学部。てことは京都。駅から遠いって聞きました。

駅から遠いよ。めっちゃ坂登る。途中から天気変わんねん冬（笑）。家からバイクで行ってんだけど、真ん中ちよつと超えたぐらいから、普通に曇りかなぐらいったのがちよつとパラパラ雪降ってくる。最後、大学の上の駐車場に行ったら、雪。結構山の上やから、まあまあ大変。

―（バイトは）していましたか？

高校のときはしてへんけど、大学のときはいろいろやったんかな。最後に塾の講師をやって終わった。塾講師は結構まわりいっぱいやってた。教員やりたいって人はやる。個別指導でね。中学校の机みたいなのを四つ合わせて一人座って、勉強してるのを見て教えてた。楽しかったな。

―で、ここに教育実習へ？

そうそう。四回生のときに教育実習に来て、そんな時、中一入ってんか。（教師になる前は）四年間全然別の仕事してて。教師になって来たときに入った高三の代に、その教育実習してた子たちがおってん。何人か「先生実習来てましたよね」って聞かれた。「よう覚えてんな。なん

で覚えてんの」「覚えてますよ」とか。懐かしかったな。これから今後
一切ないやん、そんなこと。すごいよな。

―すごいですね。高校生のときから（やりたい仕事を）決めてました
か？

ぼんやり教師をやりたいなと思ってたから、これかな。中学から高校
に上がるときにちよつと考えてて。大学になってからでいいんちゃう、
みたいな話を親としてて。

―小さいときは何も思ってたんですか？

うん。教師にはなりたくなかったけど、絶対なろうとか、固
いもんでもなかったし。なんなら就活して別の仕事してるし。

―そうなんですか。何系のお仕事だったんですか？

証券会社で四年間働いてて、前は。めちやめちや営業してた。

―卒業してから教師になろうって思わなかったんですか？

大学のときは授業取らなあかんから（教師になろうと）思ってたんけ
ど、なんか「もういいわ」って一瞬なってるな。免許自体は授業の単位
さえ取ってたらもらえんねんか。そんな難しいもんでもなくて。ただ授
業が大変。でも、仕事するためには滋賀県とか立命館で試験を受けなあ
かんねん。その勉強を三回生の秋ぐらいにしていると「無理」ってな
ってん。でも免許だけは取ろうと思ってなんとかなったな。取っという
てよかった。

―そうなんですか。教師やつぱりやろうと思ったきつかけはあるんです
か？

（証券会社では）それなりにやってて。でもなんかやつぱり違うなっ
てなるやん。別にめっちゃやりたかったわけじゃないし。で、高一のと
きの担任の先生に相談してて、「転職を考えてるんです。教師ってどん
な感じですか」って。いろいろ話してたら、そのときの三月かな。「ち
よつとやってみたいひんか」みたいな話が来て。ちよつと上司と相談しま
すって言って会社と話したら、「四月末で辞めていいよ。辞めるまで
にいろいろお客さんの引き継ぎとかしなあかんし」みたいな感じやつ
て。学校に確認したら、もう五月からでも全然オッケ―って言ってくれ
た。ほんで、（立守に）来たときがコロナでさ、四月丸々休みになるっ
てあったやん？ あんときやつて。ほんまは五月から中途半端に入るの
めっちゃ嫌やなと思ってたのが、逆にちよつとええやんみたいな
（笑）。全然なんの違和感もみんな持たへんかったし。

―じゃあもう（教師になったのは）五年前くらいですか？

五年前。小学生？ 小五か。

―ですね。コロナ禍真っ最中です。

*

卒業アルバム

―（卒業アルバムを開く）こんな感じなんですな。部活動が全然違う。
これ（集合写真を指差す）クラスですか？

そう。一、二、三（組）が理（系）。基本理系やけど、二の女子だけ
文系やった。女子は文系やつて、男子は理系。ちよつと特殊なクラス。
四、五、六（組）が文系。（写真を見て）髪型：女の子の髪型とか平成
の髪型やもんな。

—そうですね。男の子もちよつとギザギザしてる。あ、ここにサインが。

みんなお互い書こうつて。卒業式でもう（卒業アルバム）もらったから、僕らのときは。卒業式でみんなと写真撮るのに合わせて、いろんな人に書いてもらったり、先生に持ってたたりして。今はそんなことないんやけど、送辞と答辞ってあるやん。生徒会長の子が答辞を最後に読むんやけど、その前に全員登壇すんねん。最後に歌を歌うんでさ、守山市民ホールの舞台上がるんやけど。でもそれを歌う前じゃなくて、答辞の前に全員上がって、客席の方に向いた状態で生徒会長の子が答辞を読んでん。

—その後、歌うみたいなの？

—そうそうそう。（生徒会長が）同じクラスだったからさ、泣きながら帰ってきて「大丈夫か」と思いながら（笑）。やっぱ泣いてる子は何人かいた。

—いや、泣きますよね。話は変わるんですが、バスケ部で人数が少なくて難しかったことをどう乗り越えましたか？

—やっぱ一般的に部活…特にバスケなんてそうやねんけど、結構人数がいて当たり前というか。六人しかいいひんしも八人ぐらいかな、八人、九人くらいしかいいひんかったから、どう頑張ろうみたいなのは大変やった。逆に言う一年生がわつと入ってきたから……、もうそこで中入が合流して、一瞬でもう二〇人ぐらい部員が入ってきて。（今後）どうするって二年生でよう喋ったし。ほんで六人の中でも意識の違いも結構あったから、そのすり合わせもめっちゃした。「めっちゃ勝ちた

い」っていう人もいたら、「まあまあまあ、バスケそれなりに頑張れたらいいやん」みたいな人もいたし。

—意識の差ですね。

—その人たちなりにちよつとでも頑張れるようにしようっていう話をして。「なんでおまえやらへんねん」みたいな感じじゃなくて、もうそれはあえて言わんというて、「自分たちがまず頑張ろうぜ」っていう話もしてたかな。

—ぶつかりがいっぱいあった中で。

—うん。でも良かったのは、ある程度みんなバスケ頑張りたいっていう人たちがやったから、「もうやめる」みたいなやつはいひんかった。「みんな頑張ろうぜ」って最終的になってたから。

—で、また入ってきて？

—そうそうそう。一年生にも教えつつ三年になったらまた二〇人ぐらいさ、うわって入ってきて、「大変やこれは」って（笑）。やっぱ強化クラブやったから自分より明らかに上手な子も入ってくるし。楽しかったけどな、それはそれで。チーム競技やって良かったなって思うのは、そういうところかな。個人競技だったら、自分の記録だけやったけど、全体を見て後輩にも教えてみたいなのは面白かった。

—六人で話すときも小森先生を交えてみたいなのはあったんですか？

—いや、あんまり小森先生にどうこうしてもらったことはないかもしれない。自分たちの中で話して。大々的にみんなでミーティングしようぜみたいなのはあんまり。

—ちよくちよく話すみたいなの。

そうそうそう。もう部室に大体いるから、誰かが。

―その環境もすごいです。

だって土日とか普通に丸一日練習とかやってたからな。昼飯食いながらとか、部室でとかちよつと喋って。あのさ、ルール（校則）変わったやん、高校。あれってみんな的にはどうなん？

―大体はみんないいやんみたいな感じで。でも風紀を心配してる子もいます。当時、校則厳しかったですか？

昔はめっちゃ厳しかったよ。女の子のスカートめっちゃ言われてたし。服装もめっちゃ言われたし、ネクタイ上まで上げろみたいな。開けるな、ちゃんと着ろと。逐一言われてた。でもなんとなく、やっぱ大人になって大事かなって思うのは思う。自分たちの思い通りにいかへんことっていっぱいあるし、なんなら普通の一般企業勤めたときとかは、夏めっちゃ暑いけど、ジャケット着て普通に営業行けとかやし。

―（今は生徒達に）委ねられていますよね。

だから逆に厳しいなって思います。「自分で決めなさい」みたいな。こうしなさい、ああしなさいって言われた方が、多分楽は楽やねん。言われたことやつといたら「あなたいい子ね」って言われるから。でも自分で考えなさいって言われたら「え、どこまでやるの？」ってなるのは分かる。でも、大人ってそうやん。基本、大人は自分で決めて、そんな感じ。それをな、どう評価されるか。その練習と思ったらいいんじゃないかな。

―だんだん他の高校と違う感じになってくるっていうか。

でもそれはそれでいいんじゃないかなとも思う部分もあるけどね。いい意味、いい方向に浸透していったらさ。ここはこうしなあかんとか。例えば、学外の人と会うから、こういう服装しなあかんとか。今日だって制服で来てるやん、ちゃんと。別に何着てもいいって言われてるのに。でも一応、目上の人と会うから制服着て行こうとかいうのが身につくと全然いいと思う。

―大事ですね。ではお時間がきましたので、ここで終わらせていただきます。

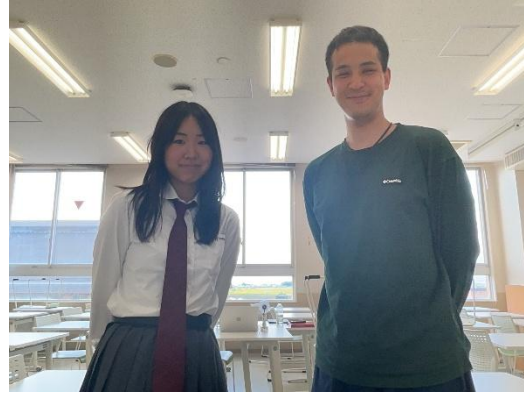
はい、ありがとうございました。

―ありがとうございました。

【感想】

今回の聞き書きの中で「自分たちがまず頑張る」という部分が印象に残りました。意見が人の中で違うことは当たり前であり、それを責めるのではなく姿勢で見せようとする姿は、今の私たちにも必要な部分だと強く感じたからです。高校での学びは大学、仕事、その先にもつながっていきます。未来の自分に恥じぬよう、語り手さんのように自分の経験を堂々と話せるような過ごし方を高校でしていきたいと思います。

（次ページへ）



右：語り手 衣川 兆さん
左：聞き手 河合 志野